

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



33

よろこびの知らせ  
第33集

目 次

もうひとりの助け主 .....	1
ヨハネ 14:16-17	
その方が来ると .....	10
ヨハネ 16:7-11	
聖霊の満たし .....	19
エペソ 5:18-21	
聖霊の証印 .....	28
エペソ 1:13-14	

ここに収められたメッセージは、2022年5～6月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

# もうひとりの助け主

ヨハネ 14:16-17

14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。

イースターから 40 日目は「キリストの昇天日」です。この日は、教会の祝祭日として長い間守られてきましたが、平日に教会に集まるのが難しくなってきましたので、今では、来週の日曜日を「キリストの昇天主日」として、主の昇天を記念するようになりました。ドイツでは「主の昇天日」は、今でも「国民の祝日」になっています。けれども、ドイツでは「父の日」と呼ばれ、男同士でビールを飲み明かす日になってしまいました。

## 一、聖霊は助け主

しかし、本来の「昇天日」はビールと何の関係もありません。イエスは天に昇っていかれるとき、聖霊を約束されました。「昇天日」は聖霊を受けるための準備の日でした。

イエスは、十字架にかかれる前の日、弟子たちと超越の食事を共にし、その後、長い時間、弟子たちに数多くのことをお話しになりました。ヨハネの福音書 13 章から 17 章には、そのときのイエスの言葉がしるされていま

す。きょうの箇所はイエスが聖霊について話された最初の箇所です。

イエスは、ここで、聖霊を「もうひとりの助け主」と呼んでおられます。「助け主」、英語では “Helper” ですが、これは、もちろん「お手伝い」という意味ではありません。聖書ではこう言われています。「私たちのたましいは主を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾」（詩篇 33:20）、「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け」（詩篇 46:1）、「まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえる方です。」（詩篇 54:4）私たちは、私たちの人生で、自分の力ではどうにもならないこと、人間の力の及ばないことに、何度か出くわすものです。どんな助けもなく、孤立してしまったように感じることがあります。しかし、そんなときにも、私たちを助けてくださるお方、それが聖霊です。

この「助け主」という言葉はギリシャ語で「パラクレートス」といいます。「パラ」（側に）と「カレオー」（呼び寄せる）が組み合わさってできた言葉です。これは、法廷での「弁護人」のことを意味します。身に覚えのないことで非難され、今まで親しかった人たちからも誤解される。とてもつらいことです。そんなときも、私たちの側を離れず、弁護してくださるお方、それが聖霊です。聖書には「私を弁護してください」という祈りが数多く出てきます（詩篇 7:8、26:1、35:24）。詩篇 54:1 には「神よ。御名によって、私をお救いくださ

い。あなたの権威によって、私を弁護してください」とあります。聖霊は、こうした祈りに答えてくださるお方、神がそのような祈りに答えるために与えてくださった「弁護者」です。

また、「パラクレートス」には、「慰め主」という意味もあります。私たちは、悲しいこと、つらいことに出会ったとき、誰かから声をかけてもらい、心配してもらえるのは、とてもありがたいことです。誰かが自分のことを心配してくれている、祈ってくれている。そのことを知るだけでも、助けられ、励まされます。しかし、深い悲しみに陥ったときや、心が折れてしまったとき、また、失望しきってしまったとき、人の助けだけでは、たましいの奥深いところにある空白を埋めることができません。いったん折れてしまった心を立ち直らせることはできないのです。けれども、そんなときでも、私たちのたましいを満たし、もういちど心を強め、失望に代えて希望を与えてくださるお方がおられます。それが「慰め主」である聖霊です。

コリント第二1:3に「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように」とあるように、父なる神は「慰めの神」です。神は「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方」（イザヤ 57:15）ですが、だからといって、この地上で、さまざまな問題と格闘している人、苦しみの中にあえいでいる人、悲しみに沈んでいる人々のことをご覧にならないというのではありま

せん。もし、私たちが重荷や苦しみ、悲しみの中で自分の無力を悟り、高慢な思いを砕かれ、へりくだって神に助けを呼び求めるなら、神は、私たちの「慰めの神」となってくださいます。神は言われます。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」聖霊は、まさに、この通りの「慰め主」なのです。

聖霊は、私たちの「助け主」、「弁護人」、「慰め主」としてすでに世に来てくださいました。それなのに、なぜ、今も「聖霊よ、来てください」と祈るのでしょうか。それは、すでに世に来てくださった聖霊を、文字通りの「パラクレートス」として、私たちの側に招く祈りです。私たちに近づいてくださる聖霊に、私たちの方からも、へりくだりと信仰によって近づこうとすることなのです。いままで、自分の頑張りやっていたことを聖霊にお任せする。自分にはできないとあきらめていたことに、聖霊の助けを求めてチャレンジしていく。私たちは、「聖霊よ、来てください」との祈りによって、助け主、弁護者、そして慰め主となってくださいるように、願い求めるのです。

## 二、聖霊はイエスの代理者

イエスは、「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります」と言われ、聖霊を「助け主」と呼ばれましたが、そのとき、「もうひとりの」という言葉を付け加え

られました。「もうひとりの」を表すときに使われるギリシャ語には「アロス」と「ヘテロス」の二つがあります。「アロス」は「同種類の」ものを表すときに使い、「ヘテロス」は「別種類の」ものを指すときに使います。聖書は、じつに注意深く書かれていて、ここでは、「ヘテロス」ではなく「アロス」が使われ、聖霊がイエスと同じ神であり、同じ栄光と力を持ち、同じ使命をもっておられる方であることを示しています。

ピリポが「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します」（ヨハネ 14:8）と言ったとき、イエスは「わたしを見た者は、父を見たのです」（ヨハネ 14:9）とお答えになりました。イエスは、ご自分が神の御子であり、父とひとつである、父の代理者であると言われました。そして、その上で、聖霊を「もうひとりの助け主」と呼ばれたのです。つまり、御子イエスが御父の完全な代理者であるように、聖霊も、御子イエスとかわるこのない、御子の完全な代理者であると言われたのです。御子が見えない神を目に見える姿で現されたように、聖霊は御子イエスのお姿を信じる者のたましいの内に描いてくださるのです。

イエスは御父と等しいお方、神の御子だからこそ、父なる神の代理者となることができました。同じように、聖霊も、御父とも御子とも等しいお方だからこそ、御子の代理者となることができるのです。御子は御父の栄光を表し、聖霊は御子の栄光を表すのです。しかし、御父から御子へ、御子から聖霊へと引き継がれるにつれて神

の栄光が減っていくというのではありません。御父の栄光も、御子が表す栄光も、聖霊が示す栄光も全く同じものです。私たちが受けた聖霊は、御父や御子に劣るとか、神以下のお方だということではありません。聖霊は、御父や御子と変わらないお方です。私たちは聖霊によって、神ご自身を、「パラクレートス」、側近くに呼び寄せられたお方として持つことができるのです。これは、驚くべき奥義です。

### 三、聖霊は真理の教師

聖霊は、私たちの「助け主」、しかも、御父や御子と変わらないお方。このようなお方が私たちと共におられ、また、私たちの内に宿っておられる。これは、信仰を持つまでは、また、聖霊を意識し、聖霊に教えを請うまでは分からなかったことでした。しかし、信仰を持ち、聖書に教えられて、私たちは聖霊を理解するようになりました。そして、その理解を与えてくださったのも、聖霊でした。イエスが「その方は、真理の御霊です」と言われた通り、聖霊は私たちを真理に導いてくださるお方です。

イエスは御父の栄光を表され、イエスの言葉は聖書に遺され、誰もが読むことができますが、すべての人がそれを理解し、イエスを信じているわけではありません。どんなに優秀な頭脳を持っていても、聖霊によって教えられるのでなければ、人は真理に至ることができないのです。神の真理はイエスによって解き明かされましたが、それを理解するには、さらに聖霊の働きが必要で



す。真理は御父から御子へ、そして御子から聖霊へと引き継がれ、私たちに伝えられます。ヨハネ 16:14に「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです」とある通りです。

きょうの箇所 17 節に「世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです」とあるように、信仰を持つ者と信仰を持たない者との大きな違いは、聖霊を受けているか、受けていないかの違いにあります。イエスを信じない人は、聖霊を知らないばかりか、聖霊を受けたいとも思わないでしょう。しかし、イエスを知ろう、イエスに従おうとするとき、私たちは自分の力でそれができないことを知ります。私たちにイエスのことを教え、イエスに従う力を与えてくださる「もうひとりの助け主」が、かならず必要になるのです。

真理に導かれるとは、たんに「神について」、「イエスについて」何かを知ることではありません。「神について」、「イエスについて」ではなく、「神を」知り、「イエスを」知ることです。つまり、神とイエスを「ことがら」としてでなく「人格」として知ることです。私たちが誰かのことを知るといふとき、その人の誕生や経歴、その他のデータを数多く持っているということではありませんね。その人の人格に触れ、その人と人格と人格の関係を持つことです。そして人格と人格との交流が、友情に、信仰者同士の場合は「兄弟愛」になっていくのです。人は、そのような人間関係によって幸いを

得、自らを成長させることができます。同じように、神との間に人格と人格の関係、つまり、神を愛し敬い、また信頼するという関係を育てることによって、そのたましいに深い満足が与えられ、人生の実りを得ることができるのです。

信仰とは「イエス・キリストは救い主である」という一般的なステートメントを承認することではありません。イエス・キリストが人格のすべてをかけて、私たちを愛してくださったように、私たちも、人格のすべてをもってその愛にお答えしようとするのです。

聖書に「神の顔」という言葉があります。これは神が人格であることを意味しており、「神の顔を求める」とは、人格である神を、わたしたちも全人格をもって求めるということを意味しています。聖霊は、私たちの知性だけではなく、意志にも、感情にも、全人格に働きかけてくださいます。そして、私たちが、人格と人格との関係との中で神を知るようにしてくださいます。「真理の御霊」である聖霊は、そのようにして、私たちを真理に導いてくださるのです。

イエスは言われました。「しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」イエスを信じる者には、聖霊が、その人の内に住んでくださいます。イエスを信じて、聖霊を私たちのうちにお迎えしましょう。この聖霊によって、さらに神を知り、イエスを知る者とされていきましょう。聖霊がくださる神とのまじわ

りの幸いを味わいましょう。イエスを知ることにおいて、さらに成長していきましょう。

(祈り)

父なる神さま、私たちに聖霊をお与えくださり、感謝します。私たちは、聖霊が信じる者と共におられること、信じる者を慰め、助けてくださること、真理に導いてくださることを学びました。この知識がたんなる知識で終わることなく、日々の生活の中で、聖霊の豊かな働きを体験することができるよう、私たちを導いてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

## その方が来ると

ヨハネ 16:7-11

16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。

16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。

16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。

16:10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。

16:11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。

聖霊は、私たちが真理に導いてくださるお方です。聖霊が導いてくださる「真理」とは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ 14:6）と言われたイエスご自身なのですが、人がイエスに導かれるためには、知っておかなければならないいくつかのことがあります。それは、きょうの箇所「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます」とあるように「罪」と「義」と「さばき」です。これらのことを示してくださるのは聖霊です。イエスはここでそのことについて教えておられます。

### 一、罪について（9節）

イエスは、はじめに、聖霊は、人々に「罪について」教えてくださると言われました。「罪について」が最初

にとりあげられているのは、「罪について」正しく知ることが救いに至る第一歩だからです。

聖書は「すべての人は、罪を犯した」（ローマ 3:23）と言っています。皆さんは、はじめてこの言葉を読んだとき、どう思いましたか。多くの人は言うでしょう。「そんなことはない。世の中には立派な人、善良な人がいくらでもいるし、私も、交通違反はしたかもしれないけど、他のことで警察のやっかいになったことはない。真面目に生きてきたし、良心的に仕事をしてきた。」けれども、聖書を読むうちに、聖書が言っている「罪」が、「犯罪」だけではなく、その根になっているものであることが分かってきます。

自然界には「万有引力の法則」をはじめとして「熱力学第零法則～第三法則」、「運動の第一法則～第三法則」、「質量保存の法則」、「エネルギー保存の法則」、「エネルギー等配分の法則」、「フレミングの右手の法則、左手の法則」、「ボイル＝シャルルの法則」、「一般相対性原理」、「アルキメデスの原理」、「パスカルの原理」など、数多くの法則があります。こうしたものは、人間が定めたものではありません。すべて神が自然界に与えた法則で、それによって自然は秩序を保っています。人間はそれを発見しただけです。科学者たちはそれを数式で表し、技術者たちはそれを応用してさまざまなものを作り出してきました。自然の法則は、地球上のどの場所でも、また、宇宙でも同じように働いています。この法則から逃れることができる人は誰

もありません。

同じように神は人間にも信仰と道德の法則を定めてくださいました。自然の法則が世界のどの国の誰にも同じであるように、信仰と道德の法則は世界のどの国、どの民族に、どんな立場にある人にも同じです。人は、国の法律を犯せば、その国によって罰せられますが、神の国の法律を犯せば、それによって裁かれるのです。

神の法律、それは聖書では「律法」と呼ばれますが、数多くの律法の中で、第一のもの、神の国の憲法のようなものが「十戒」です。十戒は二つに分かれており、前半は、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」と言って、神を敬い、礼拝することを求めています（出エジプト 20:3～11）。後半は、「あなたの父と母を敬え。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの隣人の家を欲しがってはならない」（同 20:12～17）と、他の人を尊ぶことを命じています。「殺人」、「窃盗」、「偽証」はどの国でも犯罪です。「両親を敬わないこと」、「姦淫」、「貪欲」は、犯罪として定められていなくても、道德的に非難され、社会的な制裁を受けます。そして、十戒の前半、神を信じる敬うことは十戒の後半、他の人を尊ぶことの基礎です。前半が守られないとき、後半も守られなくなるのです。つま

り、神を信じないこと、神を畏れ敬わないことから様々な罪が生じてくるのです。罪の根本は、神を信じないことにあります。

それでイエスは、「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです」と言われたのです。人は罪を持ったままでは決して幸いな人生を送ることができません。正しく、聖なる神の前に立つことができません。イエスが世に来られたのは、私たちに罪から救い、神の前に出ることができるようにし、幸いを与えるためでした。神は、救い主をひとりのユダヤ人として、ユダヤの人々の只中に遣わしてくださいました。ユダヤの人々はイエスの恵みと権威に満ちた言葉をその耳で聞き、数々の力ある奇蹟をその目で見たのです。それなのに、人々はイエスを信じませんでした。ヨハネ 1:11 は、このことを「この方はご自分の国に来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」と言っていますが、ほんとうに悲しい言葉です。

もっと悲しいことは、今も、人々が、自分の罪を認めず、救い主を無視し、斥けていることです。もし人が、重い病気にかかっているのに、「私は大丈夫、病気ではない」と言い張って、治療を受けようとしなかったら、そのことによって命を落としてしまうでしょう。同じように、自分の罪に気づかない、いや、気づこうとしないところに、私たちの問題があります。聖霊は、「その方が来ると、罪について、…世の誤りを明らかになさいます」とイエスが言われたように、まず、私たちに罪を、

信じない罪を示してくださるのです。

ある人が「神さま、私の罪を示し、それを責めてくださる恵みを感謝します」と祈っていましたが、聖霊が「罪について」私たちにその誤りを明らかにしてくださるのはまさに恵みです。私たちはそれによって罪を悔い改めて、罪の赦しの幸いを得ることができるからです。

## 二、義について（10節）

次に、聖霊は「義について」私たちに教えてくださいます。「義について」というと、ふつう、私たちは、神がどんなに正しいお方であるか、神が私たちに求めておられる正しさとは何かについてのことだと考えます。ところが、イエスは、「義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです」と言われました。これはいったいどういうことでしょうか。「わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなる」とは、イエスの昇天を指しているようですが、イエスがこの言葉を語られたのは、十字架にかかれる前でしたから、この言葉にはイエスが十字架で死なれ、墓に葬られたこと、また、そこからよみがえられたことが含まれます。つまり、イエスは、「義とは、わたしが十字架、復活、そして昇天によって成し遂げたことなのだ」と言われたのです。

ローマ 4:25 はヨハネ 16:10 を別の言葉で言い換えた箇所です。こうあります。「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」私たちはみな罪びとです。神の求



めておられる正しさに届かない者です。私たちは、誰一人、「神の律法を守り通しました」と言って自分の正しさ、「義」を主張することはできません。イエスは、そんな私たちの罪をご自分の身に負って十字架にかかけられました。イエスは私たちの罪を引き受け、代わりに、ご自分の「義」（正しさ）を私たちにくださいました。私たちの罪とイエスの義とが入れ替わったのです。そして、そのことが確かなことであることを復活と昇天によって示してくださったのです。

ほとんどの宗教は、儀式を守り、修行をし、善行に励み、自分の力で「義」を積み重ね、それによって自らを救うよう教えています。ユダヤの宗教指導者たちは、自分たちも守ることができない律法を民衆に押し付けて、「これを守れば、永遠のいのちが得られる」と教えていました。しかし、聖霊が示してくださる「義」は、それとは全く正反対の「義」です。私たちが自分の力で勝ち取る「義」ではなく、イエスが十字架と復活、そして昇天によって私たちに与えてくださる「義」です。聖霊は、罪びとである私たちがイエスの義によって神に受け入れられるという恵みを教えてくださるです。

### 三、さばきについて（11 節）

第三に「さばきについて」ですが、世の中には、神のさばきさえも恐れず、平気な顔で、自分の思い通りのこと、それもとんでもない悪いことをする人が大勢います。ですから、聖霊が「さばきについて」教えるというのは、「神が、すべて罪を犯した者をさばかれる」こと

を強く示すことだと、ふつうは考えられます。ところが、イエスはこう言われたのです。「さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。」これも、「罪について」や「義について」と同じように、私たちが考えていたこととは違っています。

サタンは神に敵対する「この世」というシステムを作り、「罪」と「死」によって人間を支配しました。イエスの復活は、この神の敵、闇と死の支配に対する決定的な勝利でした。イエスは罪と死と世に勝利し、勝利の主として天に昇り、天の御座から私たちを見守り、導き、治めてくださっています。そして、やがて、その御座から立ち上がり、再び世に来られます。そのとき、この世のあらゆる闇の力に対して最後の勝利を勝ち取られます。テサロニケ第二 2:8にこうあります。「その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」

聖霊が示してくださる「さばき」というのは、信じる者の敵に対するさばきです。イエスは信じる者をさばきから救い、私たちが罪に引き込み、縛り付けている者をさばいてくださいます。「救い」と「さばき」は、コインの表裏のようなものです。正しい者が救われるためには、正しい者を苦しめている者がさばかれなければなりません。聖書はこう言っています。「あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなので

す。」（テサロニケ第二 1:6-7）私たちはもともと正しい者ではありませんでしたが、イエスによって「正しい者」のグループに入れていただきました。さばきは過ぎ去りました。イエスのさばきは、私たちが罪に縛り付けている敵に向けられ、イエスは彼らに勝利されました。聖霊が示してくださる「さばき」は、私たちにとっての「救い」なのです。

聖霊が私たちに教えてくださるのは、「不信仰の罪」、「キリストがくださる義」、「信仰の敵に対するさばき」です。

ある人が、「私に罪なんかない」と頑固に言い張っていました。あるとき、その人は、牧師から一枚の紙を渡されて、「思い出す限りの罪をここに書いてみなさい」と言われました。その人は、自分が実際にした悪いことが、子どもの頃のことからはじめて、次々と思い出されてきました。そして、そうしたことを書き続けているうちに聖霊が働いてくださり、実際にはそうしなくても、自分の心には醜い思いがあることに気付き、それを正直に書いていくと、たちまち、その紙は、表も裏も、文字でびっしり埋め尽くされました。そして、その人は、「私の罪を赦すため、私に代わって十字架で死んでくださったイエスを信じようとしなないことが一番の罪なのだ」ということが分かり、その場で悔い改めてイエスを信じました。すると、牧師は彼の書いた紙をオフィスにあったシュレッダーに入れました。シュレッダーはその紙を吸い込み、粉々に砕きました。牧師は言いました。

「あなたの罪は、このように赦されました。イエスの義によって、あなたは正しい者とされました。あなたを責める者はさばかれました。さあ、安心して行きなさい。」

サタンは、イエスを信じていない人には「人間に罪などない。救われる必要などない」と思わせるのですが、イエスを信じた人には「おまえはたくさん罪を犯しているのではないか。おまえはほんとうに救われているのか」といって、私たちの罪を責め立てます。そのようなときも、聖霊によって「罪について」、「義について」、「さばきについて」正しく知ることができるなら、私たちは、信仰の敵に勝ち、救いの恵みを心から喜ぶ者となれるのです。聖霊が働いてくださり、多くの人々がこの平安を持ち、喜びを知り、救いの真理に導かれるよう祈り続けましょう。

### (祈り)

父なる神さま、私たちがイエスを信じ、その救いを受けることができたのは、聖霊によって罪を示され、イエスの義を与えられ、さばきを免れたからです。聖霊が私たちのうちに、また、人々の間で力強く働いてくださるよう、祈り続けることができますよう助け、導いてください。主の御名で祈ります。

## 聖霊の満たし

エペソ 5:18-21

5:18 また、ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。

5:19 詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。

5:20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって、父である神に感謝しなさい。

5:21 キリストを恐れて、互いに従いなさい。

### 一、ペンテコステと聖霊の満たし

イエスが天にお帰りになってから、イエスの弟子たちはエルサレムでひとつところに集まり、心を合わせて祈っていました。9日が過ぎて、10日目、日曜日の朝に、突然、激しい風の響きが起こり、炎のような分かれた舌が、弟子たちひとりひとりの上にとどまりました。イエスが約束されたように、聖霊が下ったのです。この日は「初穂の祭」の日でしたので、さまざまな国々に住む人たちがエルサレムに集まっていました。使徒 2:9-11 には、「パルテヤ人、メジャ人、エラム人、ローマ人、ユダヤ人、クレテ人、アラビヤ人」などの民族、また、「メソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジア、フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤ」などの地域の人々がそこにいたとあります。弟子たちは、こうした人々に、その人々の言葉で神のみわざを語りました。弟子たちは、ある程度、外国語を知っていたでしょうが、このとき、神のみわざを、現地の人たちが驚くほ

どに流暢に語ることができました。それは「聖霊の満たし」によるものでした。イエスは弟子たちに、「あらゆる国の人々を弟子としなさい」（マタイ 28:19）、また、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」（マルコ 16:15）と言われました。ペンテコステの日、弟子たちが様々な国の言葉を語ったのは、福音が聖霊の力によって全世界に広まっていくことを示すものでした。

弟子たちはペンテコステの日だけでなく、そののちも、くりかえし聖霊に満たされました。ペンテコステは歴史の中で一度かぎりの出来事ですが、「聖霊の満たし」はその後、何度も繰り返されています。そして、弟子たちは「聖霊の満たし」を繰り返すことによって、ペンテコステの日の下られ、信じる者のうちに宿っておられる聖霊に、より深く信頼するようになっていったのです。「聖霊の満たし」は「小さなペンテコステ」と言ってよいもので、弟子たちはそれによって、ペンテコステの恵みに立ち返り、その力を受けました。

使徒 2:38 に「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」とあります。この御言葉によると、私たちは、イエス・キリストを信じてバプテスマを受けたとき、バプテスマとともに聖霊をいただいたことが分かります。私たちの受けたバプテスマは、たんなる「水のバプテスマ」ではなく、「聖霊のバプテスマ」でし

た。聖霊はバプテスマとともに働いて私たちを生まれ変わらせ、神の子どもにしてくださいました。神が天地を創造されたとき、「神の霊は水の上を動いていた」（創世記 1:2）とあるように、聖霊は、バプテスマの水と共に働いて、私たちをキリストにある新しい人として、再創造してくださったのです。イエスがバプテスマをお受けになったとき、聖霊がイエスに下りました。そのように、私たちもバプテスマを受けたとき、聖霊を受けたのです。

けれども、バプテスマを受けたとき、自分が聖霊を受けたことが分かった人はほとんどいないでしょう。ほとんどの人はバプテスマを受けて、一定の時期が過ぎてからそのことが分かるようになります。すでに聖霊によって生まれ変わり、聖霊によって生かされ、導かれていても、「私のうちに聖霊がおられる」ということが、ほんとうに分かるまでには、聖書から教えられる必要があるからです。聖書から聖霊について正しく教えられ、早く分かるようになる人は幸いです。

けれども、聖霊が自分の内におられることが分かるのは、たんなる知識によるのではなく、「聖霊の満たし」によるのです。最初の弟子たちが聖霊を直接体験したように、私たちも、「聖霊の満たし」によって、聖霊を身近なお方として体験したいと思います。イエスが「もうひとりの助け主」と呼ばれた聖霊を、そのようなお方として知りたいと思います。信じる者に聖霊が下り、聖霊が信仰者を満たしてくださったことは、今から 2000 年も前

の遠い昔のことではありません。聖霊は、今も変わらず、私たちを生かし、力を与え、導き、守ってくださっています。そのことを体験として知りたいと思います。

## 二、宣教と聖霊の満たし

「聖霊の満たし」は、「使徒の働き」では、宣教、伝道、証しと結びつけて語られています。ペンテコステの当日、弟子たちは神のみわざを語り（使徒 2:4）、ペテロは人々にイエスの復活を証しました（同 2:22-40）。ペテロとヨハネが神殿で捕まえられ、最高法院で尋問を受けたとき、ペテロは「聖霊に満たされて」弁明し、また、大胆にイエスを証しました（同 4:8）。「聖霊の満たし」は、私たちに信仰を言い表し、イエスを証しする力を与えるものです。

聖書が、「聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」（コリント第一 12:3）と教えているように、聖霊は、私たちに、イエスへの信仰を言い表すのを助けてくださるお方です。教会の中でさえ、信仰を言い表すのには勇気がいります。まして、信仰を持たない人たちや信仰に反対する人たちに対して信仰を言い表し、イエスを証しするのは、自分の力だけでできることではありません。聖霊に助けられてはじめてできることです。

そして、こうした聖霊の助けは、私たちが願い求めるなら、必ず与えられるのです。ペテロとヨハネは、最高法院から「いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない」と脅された上で釈放されました。そ



のことを聞いた弟子たちは、「ああ、困った。どうしよう」などと言いませんでした。こう祈ったのです。「主よ。…あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。」（使徒 4:29）すると、弟子たちは「聖霊に満たされ」、もっと大胆にイエスの名によって語り、教えるようになりました。聖書は、「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした」（同 4:31）と書いています。心から願うときに、祈り求める人に、「聖霊の満たし」が与えられるのです。

また、聖霊の満たしは、教会での奉仕のために必要なものです。エルサレム教会で選ばれた七人の人々はみな「信仰と聖霊とに満ちた人」たちでした（使徒 6:3,5）。

### 三、日常と聖霊の満たし

では、「聖霊の満たし」は、伝道する人、奉仕する人のためだけのものでしょうか。「聖霊の満たし」は、信仰を持つすべての人のためのもの、誰もが日常生活の中で必要なものなのです。

エペソ人への手紙では、「聖霊の満たし」は、キリスト者としての信仰の歩みに必要なものとして教えられています。エペソ 5:18 の「御霊に満たされなさい」という命令は、ここで突然語られているのではなく、じつは、エペソ 4:1 から始まっています。そこには「あなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい」とあります。そして、5:8 には「光の子どもらしく歩みなさい」と言われています。聖書が「歩み」というとき、それは日常の生

活を意味します。エペソ人への手紙では、すべてのキリスト者は、聖なる神に仕える「神の民」として召されたのだから、それにふさわしく日々を送りなさい、また、この世の闇から救われ、光となったのだから、「光の子ども」らしく生活しなさいと教えられています。

そして、「聖霊に満たされなさい」という命令の直前には、「賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し」（エペソ 5:15）とあり、「酒に酔ってははいけません」（同 5:18）と戒められています。酒に酔っ払ったら、フラフラしてとてもちゃんと歩くことはできません。そんな歩みでなく、神のみこころを悟り知って、しっかりと歩きなさい。健全で堅実な生活をしなさいというのです。しかし、今日、世の中の闇がどんどん深くなっていく中で、神のみこころを悟り知るのは、以前よりももっと難しくなっています。信仰者を誘惑し、その心を捕らえて酔わせようとする「酒」のようなものに、私たちは取り囲まれています。奉仕や伝道以前に、キリスト者として歩むことを妨げているものが、あまりにも多いのです。そんなこの世を、正しく歩むためには、どうしても「聖霊に満たされる」必要があるのです。

エペソ人への手紙では、「聖霊に満たされなさい」という命令に続いて、「賛美しなさい」、「感謝しなさい」、また「互いに従い合いなさい」と教えられています。私たちが心から神を礼拝し、互いに仕えあうなら、さまざまな問題は解決し、毎日が幸せな日々になります。キリスト者なら、誰も、そのことが分かっています。

す。分かってはいるのですが、へりくだって他の人に仕えることが実行できないでいるのです。神に感謝するより不平や不満が起こってきます。他の人に仕えるより、自分のことを主張してしまいます。それは、聖霊に信頼して、聖霊の助けを求めないからです。つまり、「聖霊の満たし」を願わないからです。どんな小さいことでも、「聖霊の満たし」なしにはできません。「聖霊の満たし」は、じつに、私たちの日常の生活のために必要なのです。「聖霊の満たし」がいないほど小さなこと、たやすいことは何もありません。どんなに小さいと思えること、自分の力でなんとかなると思うことでも、「助け主」聖霊を求めましょう。また、信じる者には、聖霊の助けによって出来ないことはありません。聖霊に満たされて行うとき、不可能は可能になるのです。

このように「聖霊の満たし」が日常のものであるなら、生涯の中で何度か、あるいは年に一度、特別な集会で「聖霊の満たし」を体験すればそれでよいということにはなりません。「聖霊の満たし」は、毎日毎日、必要なものです。エペソ 5:18の「聖霊に満たされなさい」という言葉は現在形で書かれています。それには「聖霊に満たされ続けなさい」という意味があります。私たちの生活は日々変化し、私たち自身もキリストにあって日々成長しています。育ちざかりの子どもが、食べても、食べても、お腹が空くように、キリストにあって成長しているクリスチャンは、成長するにしたがって、さらに聖霊に満たされる必要があるのです。聖霊に満たされて成

長し、成長すればさらに満たされる必要が生じるのです。ですから、私たちは、「満たされ続け」なければならないのです。

旧約の時代、預言者エリシャが、ひとりのやもめを、神の力によって助けたことがあります。彼女は夫がのこしていった借金のかたにふたりの子どもを奴隷にとられようとしていました。エリシャは彼女に、近所の人たちからできるかぎりたくさんの器を借りてきなさいと言いました。彼女の家にはたったひとつ、小さな油のつぼしか残っていませんでしたが、エリシャは、そのつぼから、借りてきた器に油を注ぎなさいと言いました。小さな油のつぼから大きな器に油を注げば、油はたちまちなくなるはずです。ところが、いくら油を注いでも、つぼから油がどんどん出てくるのです。彼女は子どもたちに次々と器を持ってこさせましたが、そのどれも油でいっぱいになりました。彼女が子どもに「もっと器を持ってきなさい」と言いましたが、子どもが「もうありません」と言ったとき、つぼから出る油が止まりました。彼女はその油を売って、借金を返し、子どもたちを救いました（列王記第二 4:1-7）。

この物語は「聖霊の満たし」について、私にヒントを与えてくれました。それは、私たちの内面が神の前に空っぽになるなら、それを聖霊が満たしてくださるということです。聖霊に助けをいただく領域が大きければきいほど、また、求めが深ければ深いほど、神は、私たちを豊かに聖霊で満たしてくださるのです。もし、私たち

が「これで十分です」と言って、信仰の求めをストップしてしまうなら、そこで天からの油そそぎもまた止まってしまうのです。

「御霊に満たされなさい。」今から二千年前、天から下ってこられた聖霊は、今も、変わりなく、私たちと共にいて、求める者を満たしてくださいます。そのことを信じて、きょうからの一日、一日を「聖霊の満たし」を願いながら過ごしたいと思います。

### (祈り)

父なる神さま、聖霊が私たちの日々の生活の中に働いてくださることを教えていただきありがとうございます。御言葉が教えるように、生活のどのことがらにおいても「聖霊の満たし」を求め、それを体験することができますよう導いてください。そして、聖霊に満たされた日々の生活を土台として、キリストを証しする者となることができますよう助けてください。主イエス・キリストのお名前です。

## 聖霊の証印

エペソ 1:13-14

1:13 またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことは、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによつて、約束の聖霊をもつて証印を押されました。

1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

「三位一体」という言葉そのものは、聖書にはありませんが、聖書は、いたるところで、父なる神も、御子なる神も、聖霊なる神も永遠のはじめからおられ、その栄光において等しいお方であり、父と御子と聖霊は完全にひとつであることを教えています。

エペソ 1:3-14 は、そうした箇所のひとつで、3-6 節は「父なる神」について、7-12 節は「御子イエス・キリストについて」、13-14 節は「聖霊」について書かれています。内容的には、はっきりと三つに区分されているのですが、原文では切れ目のないひとつの文章で書かれています。200 以上の単語がずうとつながっています。三つの内容が一つの文章で書かれていることは、神が父、御子、聖霊の三つの位格でありながら、おひとり、一体であることを教えているように思います。

水は常温では液体ですが、高温になると水蒸気となり、気体になります。また、低温になると氷となって個体になります。しかも、どの状態でも H<sub>2</sub>O という本質は変わりません。「三位一体」をこれにたとえることがで

きますが、正確ではありません。このたとえばでは、お一人の神があるときは父、別のときは子、さらに別のときには聖霊の三つの姿で現れたのに過ぎないということになります。「三位一体」は自然界や人間界を超えたもので、天にも地にも同じものはありません。ですからそれは理論やたとえで理解することはできません。それは、父と御子と聖霊によって救われた者が、その救いの恵みの中ではじめて知ることができるものなのです。

### 一、父なる神と子とされること

まず、父なる神は、私たちがどのように救ってくださったのでしょうか。3-6節では、父なる神が信じる者をご自分の子どもにしてくださいと書かれています。5節にこうあります。「神は、ただみこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。」親の保護も、愛もないままに見捨てられた子どものように生きていた私たちが神の子どもにされ、神も私たちの「父」となってくださったことを言います。これは英語では “adoption” と言われます。養子縁組のようにして、神は私たちをご自分の子どもにしてくださいのです。

サンフランシスコ国際空港はサンフランシスコ湾の西側にありますが、その東側の湾岸にサンロレンゾという小さな町があります。その町の教会にクラーク桂子さんという人がいます。彼女は、戦後すぐ、日本でアメリカ兵と日本人女性の間にも生まれましたが、両親から捨てら

れました。大変つらい青春時代を過ごしました。そんな中で俳優の森繁久弥さんと出会い、また、アメリカから宣教師としてして来日していたクラーク青年と出会いました。クラークさんと結婚してアメリカに行こうとした時、彼女に戸籍がなく、出国が許されませんでした。森繁さんは、彼女のために役所と掛け合ったのですが、埒があきませんでした。それで、森繁さんは、彼女を自分の養女にし、その戸籍を役所に提出したのです。「桂子はわしの娘だ。どうだ。これで文句があるかと役人に言ってやった」と、森繁さんは、ある雑誌に書いていました。

私たちの父なる神は、イエス・キリストによって私たちを救い、私たちを、ご自分の子どもとしてくださいます。神は、私たちに「あなたはわたしの息子、娘だ」と語りかけてくださるだけでなく、天に向かっても、地に向かっても、「これは、わたしの子だ」と宣言してくださるのです。ですから、私たちは神を「父なる神さま」、「天におられる父よ」と呼ぶことができます。私は神を「父よ」と呼んで祈るたびに、また他の人がそう祈るのを聞いて、神の限りない愛を感じます。私たちに「父よ」と呼びかけることを許してくださる神は、「三位一体」の神の他ありません。

## 二、御子イエスと贖い

次の7-12節には、御子イエス・キリストの「贖い」が書かれています。「贖い」は、まず「罪の赦し」をもたらします。7節に「私たちは、この御子のうちにあつて、



御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです」とある通りです。罪ある人間は、そのままでは、聖い神に近づくことはできません。罪がどこかで解決されなければならないのです。最近、日本では「自分を赦す」ということがよく言われているようです。しかし、他の人を傷つけたものは、その人から赦してもらわないかぎり、自分で自分を赦すことはできません。まして、神に対する罪は聖なる神に対する罪ですから、神が「赦す」と言ってくださらなければ、ほんとうの「赦し」はないのです。

この罪の赦しは、7節に「御子の血による贖い」と言われているように、イエス・キリストが十字架の上で血潮を流されたことによってのみ勝ち取られるものです。旧約時代の人々は罪の赦しを得るために動物の犠牲をささげました。しかし、それによっては、罪の赦しを確信することができませんでした。動物のいけにえは、イエス・キリストによる完全な罪のための犠牲を予告するものでしかなかったのです。キリストの血以外に私たちの罪を赦し、私たちを罪からきよめるものはありません。御子イエスの血による贖いによってはじめて、私たちは罪の赦しを受け、その喜びを知ることができるのです。私たちはこの罪の赦し受けるまでは、いつも不安です。どんなに楽しいことがあっても、それを本当に喜ぶことができません。罪の赦しの喜びを知ってはじめて、人生のさまざまな喜びを喜びとして味わうことができるのです。

また「贖い」には「解放」という意味があります。かつて奴隷には人格が認められず、主人の所有物と見なされ、お金で売り買いされました。しかし、逆に「贖い金」を払えば、束縛から解放され自由になることができました。初代教会では、奴隷を持っている主人には奴隷を解放するよう指導していましたが、クリスチャンになった奴隷たちのために「贖い金」を、教会で積み立てていたことが知られています。聖書は、「すべて罪を犯す者は罪の奴隷である」と教えていますが、イエス・キリストは、私たちが罪の奴隷から解放するため、ご自分の命を「贖い金」として差し出してくださいました。イエス・キリストの贖いによって、私たちはほんとうの自由を得たのです。

贖いという言葉には、さらに「一つにする」という意味があります。神が、この世界を造られた時、造られたものを見て「よし」とされました。「神は見て、それをよしとされた」と創世記にあります。神は最後に人間を造り、この世界の全てが完成しました。聖書は、神の創造のわざを、「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった」（創世記 1:31）という言葉で結んでいます。このように、神が造られた最初の世界には、すべてのものに一致と調和がありました。神は人に語りかけ、また人に聞き、人は神に聞き、また神に語りかけました。アダムとエバは心を合わせてエデンの園を守っていました。

ところが、人が神に背き、神から離れた時、アダムと

エバは互いに相手を非難し、自分の罪を他のせいになりました。アダムとエバの子、カインは弟アベルをねたみ、アベルを殺しました。それまで人間に優しくかった自然が人間を苦しめるようになりました。イエス・キリストの「贖い」は、この神と人との分離、人と人との分裂、自然と人との不調和をいやし、もう一度、神と人、人と人、人と自然を一つにするものなのです。「贖い」を表わす英語には “redemption” のほかに “atonement” という言葉があります。これは、“at-one-ment” と綴るように、キリストにあって、すべてのものが一つになること、世界がもとの調和を取り戻すことを表わしています。エペソ 1:10 に「時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められる」とあるのは、このことを指しています。

### 三、聖霊と救いの保証

では、聖霊は、私たちの救いにどのように関わってくださるのでしょうか。父なる神は救いを計画し、御子がそれを実現しましたが、聖霊は、御子が実現した救いを私たちのものとしてくださるのです。救いは御子キリストによってすでに成就しました。けれども、それで私たちが自動的に救われるのではありません。救いの福音を聞き、それを信じるまでは、救いはまだ私たちの外側にしかありません。しかし、私たちが福音を聞いてそれを信じる時、聖霊は私たちの内側に住んでくださいます。そして、聖霊が私たちの内側に入って来られると

き、救いも私たちの内側にやって来るのです。13節に「約束の聖霊をもって証印を押されました」とあるように、聖霊は、救いの証印だと言われています。これには三つの意味があります。

第一は、聖霊が救いの約束を確かなものにしてくださったということです。私たちが誰かと重要な約束をする時は、それを間違いのないものにするため、書類を作ります。契約書です。聖書は「旧約」や「新約」と呼ばれるように、神の契約の書物です。神は「わたしはあなたを救い、わたしの民とし、あなたを祝福する。もし、そうしなかったら、この契約書にもとづいて訴えてもよい」と言っておられるかのようです。この契約書だけでも十分なのですが、神は、この契約書に、キリストが十字架で流してくださった血によって「署名」してくださいました。そればかりか、神は、この契約書に聖霊によって「証印」を押してくださったのです。日本では印章ですが、アメリカでは、たいていは円形のシール（“seal”）です。このシールが書類に刻まれる時、その書類は二重、三重の意味で確かなものになります。聖霊は私たちに救いが成就したことを確認し、この救いが確かなものであることを保証してくださるのです。

第二に、聖霊は、私たちが神のものであることのしるしです。聖霊は、私たちが神の子どもであり、キリストによって贖われた者であること、神の子どもであり、神のものとされていることを確かなものとしてくださり、その確信を私たちに与えてくれます。そして、この確信

が、困難なときも、私たちの人生を支えてくれるのです。

第三に、14節にあるように「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証」です。ここでの「保証」は「手付け金」という意味になります。神の国は聖霊によってすでに私たちのところに来ています。聖書に「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」（ローマ 14:17）とある通りです。私たちは、今、この地上でも、聖霊によって、神の国の喜びや平安をいただいています。それらは、神の国の祝福の一部で、「手付け金」のようなものです。やがての時、残りのすべてを受け継ぐことが、聖霊によって保証されているのです。

このように、私たちは父なる神によって、御子イエスによって、そして、聖霊によって救われています。この私ひとりの救いのために父なる神と御子イエス、そして聖霊が総掛かりで働いてくださっている。神はそんなにしてまで私たちを愛してくださっている。「三位一体」を理解するとは、この神の愛を受け取ることです。キリストの恵みに信頼することです。聖霊のまじわりにとどまることです。たしかに「三位一体」は人間の理性を超えた神秘です。しかし、それは私たちからかけ離れたものではありません。神がその大きな愛で備えてくださった救いのうちに示されています。この救いを受け入れ、救いの確信を与えられ、救いの喜びにあずかることによって、私たちは、「三位一体」の神を、より深く知る

ことができ、この神を崇めることができるようになるのです。

(祈り)

父なる神さま、あなたは御子イエスによって私たちが罪の奴隷から贖い、あなたの子どもとし、聖霊によって御国を受け継ぐ保証を与えてくださいました。あなたの救いのみわざを思うたびに、そこに示された「三位一体」の奥義を見い出す者としてください。そして、いよいよあなたの栄光をほめたたえる私たちとしてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。





**Penguin Club**  
[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)